岩 井 珠 惠 氏
（株式会社クリエイティブフォーラム代表取締役／ヴィジュアルデザイナー）

略歴
神戸市生まれ。1970年京都市立芸術大学美術学部卒業。1986年に株式会社クリエイティブフォーラム設立に参加。ヴィジュアルデザイナーとして、構造物の景観形成やモニュメントデザインなどの環境創造から広報制作まで幅広いデザイン活動を行っている。

## 「地域らしさ」創出と「場」の把握

### 場の関係性を考えることが重要

●色彩や景観を考える際、ある対象物だけではなく、その背景など見えている範囲全体の空間との関係性を考え、地域らしさを出したい。

### 色彩は地域らしさを端的に表す重要な要素

●色彩は、誰にでもわかりやすく、大量の情報を出しており、その地域らしさが端的に表れるものである。旅先では花、人の服の色、太陽の光の色などから地域らしさを感じる。地域らしさを出すのに色彩は非常に重要である。

●色彩は歴史、文化、民俗、気質など「地域らしさ」を見た目にわかりやすく表現している。

### その地域の色の関係性を知る事が必要

●景観の中で構造物はその周辺と一体的に見え、その全体が地域らしさを創出する。構造物に色をつける場合は、その地域の環境色の関係性を知ることが必要である。

### 色彩の選定プロセス

（調査から選定まで）

●現況調査を行い、複数の候補案の色を選び、当該地域のコンセプト、将来像あるいは、その構造物の景観に係るコンセプトを考えながら、CG等でビジュアル化して絞込み、最後にテストピースを作って現場に置いてみて色彩を決定するという流れになる。

### 季節による色の変化に配慮することが大切

●色彩は、同じ地域でも春夏秋冬で変わるため、一年を通して調査をし、四季の変化を捉える必要がある。

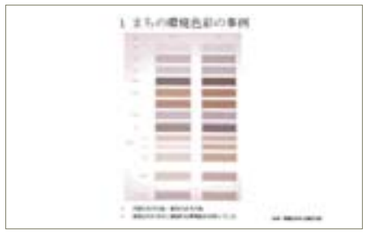
●季節により空や草木（緑）の色は変わっていくものである。例えば、初夏は明るい緑、夏は濃い緑、秋は紅葉など。そのように背景の色が変化することを認識して、その中で調和する色を選ぶことが必要である。

春:新芽のひわ色の色彩が目につく、海面は彩度が低い
夏:新緑が目につく=春とは異なる色調である
秋:紅葉で植物の色が一変する、海面の彩度が高い
冬:紅葉の明度が低くなり、海面が鈍色になる
春夏秋冬の色彩の変化を認識の上、構造物の色彩選定を行う

### 地域により個性が現れる色彩

●例えば東京と大阪とでは環境色が違う。大地（土・砂）の色、緯度の違いによる太陽の色などが異なる。このように色彩という観点からも、地域は個性を持っている。

●奈良盆地などモヤがかかることが多い地域では同じ色でも見かけの色が違うように見える。



### ラングドックルシオンは環境色彩のお手本

●南仏のラングドックルシオンは、環境色彩の手本となるまちである。旧村の建物等からカラーパレットをつくって、これを基にした色彩の景観づくりがされている。カラーパレットは、建物の外壁、窓枠などそれぞれごとに数色の色が決められており、その中から自由に選ぶことができるようになっている。

### 色彩の決定には地域のコンセプトが大切

●調査を行い、色を選び、形を決めていく中でコンセプトがとても重要になる。同じように調査をしていっても、場所が違い、コンセプトが変わると、できるものは異なってくる。

●武庫川汐止め堰ではコンセプトを「桜回廊・瀬戸内海側のはじまり」として、やわらかな色使いとし、紀ノ川大堰では「空と水が出会う堰」として、しっかりとした色使いとした。

●塩倉橋はそぞろ歩きを楽しめるやさしい道、南港大橋は大型車が通る力強い場と捉えデザインしている。

●明石海峡大橋の現場のできるだけ目立たないというコンセプト、川崎人工島の作業員や船から認識しやすいというコンセプト、名古屋の下水道のシールド発進基地の目立つというコンセプトなど、場所や地域の気質などに影響を受けてコンセプトは変わってくる。

### 計画当初から維持管理に至るまで景観という考え方の要素を取り入れることが必要

●景観検討は事業計画の最初から参画しないと本当に良い効果が得られない。ダムの形式、道路の路線を決める時から、景観という考え方の要素を入れる必要がある。

●計画を始める一歩手前にまず地域の歴史、由緒、自然、文化、景観的特性などを調査し、土木的条件を考えずに理想的な景観形成コンセプトをつくった後に、具体の事業計画づくりに入ることが重要である。

●もう一つ大事なことは、作った後にどう維持管理していくかであり、維持管理計画についてマニュアル化することが重要である。

●初めから景観要素を取り入れていくことで、小さな投資で大きな効果が期待できる。